# 生死を超える道

# ---親鸞が見出した仏道---

沖 和 史

#### 0. はじめに

仏教は本来出家得道の宗教である。そのことは仏教の開祖釈尊の出家・成道・説法の伝説に見られる通りである。すなわち、仏教は根本的に世俗的価値からの離脱を目指すゆえ、世俗にありながら道を学ぶことは基本的に不可能なのである。

一方,ジャータカを淵源とする大乗菩薩行は,布施行の描写に見られるように,世俗にありながら世俗を超絶した想像を絶する行である。

大乗仏教が万人の成仏を理想として掲げつつ、成仏のための修行はほとんど誰も行い得ない点が、本願他力が要請される根本的理由であろう。日常生活に埋没した人は、世俗の価値観から脱し仏道を歩む契機を見出すことができず、また、契機を見出したとしても自力修行は困難を極めるからである。その隘路を突き破る唯一の仏道が、自己の内にない(すなわち、超絶的な本願に基づき仏道を完成した他者から与えられたとしか言いようのない)価値が新しい生き方を示し力を与えるという思想にもとづく仏道であると宣言したのが法然房源空であった。

# 1. 他力の思想

彼が示したのは、世俗にありながら生死を超える仏道としての念仏(称名)行である。阿弥陀仏の平等の慈悲により、一切衆生が包摂されているという信念がその根本にあり、すべての思想を支えている。それは阿弥陀仏が完成した易行こそ勝行という価値の発見に他ならなかった。衆生の行業の有効性を保証するのは、阿弥陀仏の選択にもとづく修行の成果すなわち本願力であるという思想が、『選択本願念仏集』を貫いているのである。

善信房親鸞は、源空が明らかにした仏教の真実性を証明するために著した『顕浄土真実教行証文類(教行信証)』において、横・竪と超・出の組み合わせにより四種の仏道を示し、横超の仏道こそ凡夫の進むべき仏道であると判定する。そして仏道を歩む弟子を真・仮・偽に分かち、目的達成の確かさの観点から真の仏弟子か否かを判別し、生死を超える道を明示したのである。

# 2. 親鸞の見究め――生死と涅槃の観点から――

## 2.1. 超 証

親鸞は浄土に往生するとすぐさま仏果を得ると考えている。彼によれば、 凡夫にとって生死を超え出る最も速く確実な成仏道が専修念仏による往生 浄土 (横超) なのである。それゆえ浄土往生を願い念仏する者が「真の仏 弟子」と呼ばれ、その証果はしばしば「超証」と呼ばれる。それは例えば 以下の**資料 1 - 4** に示されている。

- 資料 1 (教行信証信巻 254): 横超断四流といふは, 横超とは, 横は堅超・竪出に対す, 超は迂に対し回に対するの言なり。竪超とは大乗真実の教なり。竪出とは大乗権方便の教, 二乗・三乗迂回の教なり。 横超とはすなはち願成就一実円満の真教, 真宗これなり。 また横出あり, すなはち三輩・九品, 定散の教, 化土・懈慢, 迂回の善なり。 大願清浄の報土には品位階次をいはず。 一念須臾のあひだに, すみやかに疾く無上正真道を超証す。 ゆゑに横超といふなり。
- 資料 2 (教行信証信巻 256-257): <u>真の仏弟子</u>といふは, 真の言は偽に対し仮に対するなり。弟子とは釈迦諸仏の弟子なり, <u>金剛心の行人なり</u>。この信行によりてかならず大涅槃を超証すべきがゆゑに, 真の仏弟子といふ。
- 資料 3 (教行信証信巻 264): まことに知んぬ、弥勒大士は等覚の金剛心を窮むるがゆゑに、竜華三会の暁、まさに無上覚位を極むべし。念仏の衆生は横超の金剛心を窮むるがゆゑに、臨終一念の夕べ、大般涅槃を超証す。ゆゑに便同といふなり。しかのみならず金剛心を獲るものは、すなはち韋提と等しく、すなはち喜・悟・信の忍を獲得すべし。これすなはち往相回向の真心徹到するがゆゑに、不可思議の本誓によるがゆゑなり。
- **資料 4**(唯信鈔文意 711-712):この一心は<u>横超の信心</u>なり。横はよこさまといふ,超はこえてといふ,よろづの法にすぐれて,すみやかに疾く生死海をこえて仏果にいたるがゆゑに超と申すなり。これ 生死を超える道──親鸞が見出した仏道── (沖 和史) — 39 —

すなはち大悲誓願力なるがゆゑなり。この信心は摂取のゆゑに金剛心となれり。これは『大経』の本願の三信心なり。この真実信心を世親菩薩(天親)は、「願作仏心」とのたまへり。この信楽は仏にならんとねがふと申すこころなり。この願作仏心はすなはち度衆生心なり。この度衆生心と申すは、すなはち衆生をして生死の大海をわたすこころなり。この信楽は衆生をして無上涅槃にいたらしむる心なり。この心すなはち大菩提心なり、大慈大悲心なり。この信心すなはち仏性なり、すなはち如来なり。

## 2.2. 「生死」の表現―伝統的表現の継承―

では、超克されるべき「生死」を、親鸞がいかに受け止めているかを見よう。親鸞は伝統的表現を踏襲して、「生死」を様々な象徴表現と組み合わせて示している。

#### 2.2.1. 輪 廻

第一に生死は輪廻(迷い、苦、罪悪、束縛)として示される。輪廻の基本的性格は、その中の生き方の局限性・閉鎖性であり、我執に縛られ自由と普遍性を信じないあり方である。以下その例を示す。

有輪:無始生死の有輪(260)

三有:三有の生死(255) 三有生死の雲(486)

苦:無始生死の苦(148) 悪道生死等の苦(388)

縛:一切生死の縛(200)

重罪,罪:八十億劫の生死の重罪(166) 八十億劫の生死の罪(416,716)

─ 40 ─ 生死を超える道──親鸞が見出した仏道──(沖 和史)

「生死」の譬喩表現としては以下の例が見られる。「生死之家」は源空の 用例に見られるが、これに対比される「涅槃之城」(資料21)は、インド 仏教以来の譬喩表現である。

園,林,稠林:生死の稠林(242,313) 生死の園(243,313,334,487);煩悩の林(205,243,313,334,487)

海:生死海(241, 242, 313, 474, 702, 712) 生死のうみ(609) 黒闇生死海(408) 生死の大海(410, 602, 673, 680, 712) 生死大海(606, 667, 670);煩悩海(241)

流れ: 生死の流(255, 433)

閣, 黒闇:黒闇生死海(408) 生死の闇(664)

長夜: 牛死のながき夜(672) 牛死の長夜(701)

雲:三有生死の雲(486)

家: 生死輪転の家(207, 489) 生死之家(665, 666) 生死の家(666)

## 2.2.2. 凡夫のありさま

その生死は煩悩具足の凡夫のありようである。以下資料を示す。

**資料 5**(教行信証行巻 147): 凡夫道は究竟して涅槃に至ることあたは ず、つねに生死に往来す。これを凡夫道と名づく。出世間は、こ の道によりて三界を出づることを得るがゆゑに、出世間道と名づく。

**資料 6** (教行信証信巻 226): <u>衆生</u>久しく生死に沈みて, <u>曠劫より輪廻</u> し, 迷倒してみづから纏ひて, 解脱するに由なし。

生死を超える道――親鸞が見出した仏道――(沖 和史) ― 41 ―

- 資料 7 (教行信証信巻 241): しかるに<u>微塵界の有情</u>,<u>煩悩海に流転し</u>,生死海に漂没して,真実の回向心なし,清浄の回向心なし。このゆゑに如来,一切苦悩の群生海を矜哀して,菩薩の行を行じたまひしとき,三業の所修,乃至一念一刹那も,回向心を首として大悲心を成就することを得たまへるがゆゑに,利他真実の欲生心をもつて<u>諸有海</u>に回施したまへり。欲生すなはちこれ回向心なり。これすなはち大悲心なるがゆゑに,疑蓋雑はることなし。
- 資料 8 (教行信証証券 307. cf.愚禿鈔 482): しかるに <u>煩悩成就の凡</u> 夫,生死罪濁の群萌,往相回向の心行を獲れば、即のときに大乗 正定聚の数に入るなり。正定聚に住するがゆゑに、かならず滅度に 至る。
- **資料 9** (龍樹讃 579): <u>生死の苦海ほとりなし</u> <u>ひさしくしづめるわれら</u>をば 弥陀弘誓のふねのみぞ のせてかならずわたしける

#### 2.2.3. 自力修行の限界

凡夫が生死に沈み漂流するのは、その修行能力に根源的限界があるゆえ であると親鸞は見ている。以下資料を示す。

資料 10(龍樹讃 579-580): 一切菩薩ののたまはく われら因地にあり しとき 無量劫をへめぐりて 万善諸行を修せしかど 恩愛はなは だたちがたく 生死はなはだつきがたし 念仏三昧行じてぞ 罪 障を滅し度脱せし

─ 42 ─ 生死を超える道──親鸞が見出した仏道──(沖 和史)

資料 11(御消息 786):まづよろづの仏・菩薩をかろしめまゐらせ、よろづの神祇・冥道をあなづりすてたてまつると申すこと、この事ゆめゆめなきことなり。世々生々に無量無辺の諸仏・菩薩の利益によりて、よろづの善を修行せしかども、自力にては生死を出でずありしゆゑに、曠劫多生のあひだ、諸仏・菩薩の御すすめによりて、いままうあひがたき弥陀の御ちかひにあひまゐらせて候ふ御恩をしらずして、よろづの仏・菩薩をあだに申さんは、ふかき御恩をしらず候ふべし。

資料 12(教行信証信巻 244, cf.愚禿鈔 512):『観経義』(玄義分) に,「道 俗時衆等,おのおの無上の心を発せども, 生死はなはだ厭ひがたく, 仏法また欣ひがたし。ともに金剛の志を発して,横に四流を超断せ よ。まさしく金剛心を受けて,一念に相応してのち,果,涅槃を得 んひと」といへり。

#### 2.2.4. 機の深信

その凡夫の根源的限界は、他力回向の信心により、すなわち阿弥陀仏により教示される転換点が凡夫に内面化されることにより、自らの絶対的 基盤に転化される。

**資料 13**(教行信証信巻 217-218)(愚禿鈔 521, cf.行巻 166): 〈二者深心〉。 深心といふは、すなはちこれ深信の心なり。また二種あり。一つには、決定して深く、自身は現にこれ 罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかたつねに没し、つねに流転して、 出離の縁あることなしと信ず。 生死を超える道— 親鸞が見出した仏道— (沖 和史) — 43 — 資料 14(教行信証信巻 256): 光明寺の和尚(善導)のいはく(般舟讃),「もろもろの行者にまうさく,凡夫の生死食じて厭はざるべからず。 弥陀の浄土軽めて欣はざるべからず。厭へばすなはち娑婆永く隔つ, 欣へばすなはち浄土につねに居せり。隔つればすなはち六道の因亡 じ、輪廻の果おのづから滅す。因果すでに亡じてすなはち形と名と 頓に絶えぬるをや」と。

## 2.3. 実の生死―私たちが経験する誕生と死亡, または実体的輪廻―

以上の通り、親鸞が語る「生死」はあくまでも輪廻(無始時来の混迷の連続)を示しており、仏教の伝統を寸分も外れることがない。すなわち、 日常経験下の誕生と死亡を示すものではない。それを大乗経論において確 かめたのは曇鸞であり、親鸞もそれを受け継いでいる。

資料 15(教行信証行巻 157): 問うていはく、大乗経論のなかに、処々に〈衆生畢竟無生にして虚空のごとし〉と説きたまへり。いかんぞ天親菩薩〈願生〉とのたまふやと。答へていはく、〈衆生無生にして虚空のごとし〉と説くに二種あり。一つには、凡夫の実の衆生と謂ふところのごとく、凡夫の所見の実の生死のごとし。この所見の事、畢竟じてあらゆることなけん、亀毛のごとし、虚空のごとしと。二つには、いはく、諸法は因縁生のゆゑに、すなはちこれ不生にして、あらゆることなきこと虚空のごとしと。天親菩薩、願生するところはこれ因縁の義なり。因縁の義なるがゆゑに仮に生と名づく。凡夫の実の衆生、実の生死ありと謂ふがごときにはあらざるなりと。

なお,「生死無常」という表現は「諸行無常」の法則を示していると考 えられる。

**資料 16**(御消息 16: 770-771): なによりも、去年・今年、老少男女おほくのひとびとの、死にあひて候ふらんことこそ、あはれに候へ。ただし生死無常のことわり、くはしく如来の説きおかせおはしまして候ふらへは、おどろきおぼしめすべからず候ふ。

## 2.4. 生死を離れること

親鸞には「生死即涅槃」という大乗仏教に特徴的な即一の論理も見られる。

**資料 17**(教行信証行巻 206, cf.192, 488, 550, 584): 惑染の凡夫, <u>信心発</u> すれば, 生死すなはち涅槃なりと証知せしむ。かならず無量光明土 に至れば、諸有の衆生みなあまねく化すといへり。

本願を信じる身となれば、排除と分断の世界(生死)は必ず普遍的価値によって超克されることが明らかになるのである。「生死即涅槃」は、二項対立を事実と誤認する生死輪廻の世界が、二項対立のない真実(涅槃)により包摂された状態を表現していると見ることができる。すなわち、本願を信じる者はむなしく排除と分断の世界(生死)に留まることがないのである。

資料 18(一念多念証文 691):『浄土論』にいはく、「<u>観仏本願力</u> <u>遇無空過者</u> 能令速満足 功徳大宝海」とのたまへり。この文のこころは、「<u>仏の本願力を観ずるに、まうあうてむなしくすぐるひとなし</u>、 生死を超える道— 親鸞が見出した仏道— (沖 和史) — 45 — よくすみやかに功徳の大宝海を満足せしむ」とのたまへり。「観」 は願力をこころにうかべみると申す、またしるといふこころなり。 「遇」はまうあふといふ、まうあふと申すは本願力を信ずるなり。 「無」はなしといふ、「空」はむなしくといふ、「過」はすぐるとい ふ、「者」はひとといふ。むなしくすぐるひとなしといふは、信心あ らんひと、むなしく生死にとどまることなしとなり。

本願を信ずる人のありようは、本願を信じ念仏を申す姿として示される。

資料 19(御消息 26: 785): 念仏往生と信ずる人は、辺地の往生とてきらはれ候ふらんこと、おほかたこころえがたく候ふ。そのゆゑは、弥陀の本願と申すは、名号をとなへんものをば極楽へ迎へんと誓はせたまひたるを、ふかく信じてとなふるがめでたきことにて候ふなり。信心ありとも、名号をとなへざらんは詮なく候ふ。また一向名号をとなふとも、信心あさくは往生しがたく候ふ。されば、念仏往生とふかく信じて、しかも名号をとなへんずるは、疑なき報土の往生にてあるべく候ふなり。詮ずるところ、名号をとなふといふとも、他力本願を信ぜざらんは辺地に生るべし。

浄土(報土)に往生したものは、二項対立に執着する生死輪廻の世界が、 二項対立のない真実(涅槃界、報土)に包摂されていることを超証する。 その結果、生死の世界に還って二項対立のない世界の実現に向かって絶え 間なく活動することになる。回向による本願力の体現・現出の過程は、次 のように述べられる。 資料 20(教行信証信巻 242):『浄土論』(論註・下)にいはく、「〈いかんが回向したまへる。一切苦悩の衆生を捨てずして、心につねに作願すらく、回向を首として大悲心を成就することを得たまへるがゆゑに〉(浄土論)とのたまへり。回向に二種の相あり。一つには往相、二つには還相なり。往相とは、おのれが功徳をもつて一切衆生に回施したまひて、作願してともにかの阿弥陀如来の安楽浄土に往生せしめたまふなり。還相とは、かの土に生じをはりて、奢摩他毘婆舎那方便力成就することを得て、生死の稠林に回入して、一切衆生を教化して、ともに仏道に向(かへ)らしめたまふなり。もしは往、もしは還、みな一衆生を抜いて生死海を渡せんがためにしたまへり。このゆゑに〈回向為首得成就大悲心故〉とのたまへり」と。

# 3. 源空の仏道――凡夫成仏の必然としての行信――

源空の仏道は、「生死を離れよう」と欲する心を速やかに起こしてそれを実現するための最上の確実な行として、称名を選び取るという形で示されるが、これが親鸞の原点となったことは、『教行信証』において源空からの引用文が所謂「略選択」に限られる点から推測することができる。「略選択」など源空の要文は『尊号真像銘文』において次の通り説明されている。

**資料 21**(尊号真像銘文 664-667, cf. 教行信証行巻 185-186):比叡山延暦 寺宝幢院黒谷源空聖人真像

『選択本願念仏集』云「南無阿弥陀仏 往生之業 念仏為本」[文] 生死を超える道――親鸞が見出した仏道――(沖 和史)― 47 ― 又曰「夫」速欲離生死 二種勝法中 且閣聖道門 選入浄土門 欲 入浄土門 正雜二行中 且抛諸雜行 選応帰正行 欲修於正行 正 助二業中 猶傍於助業 選応専正定 正定之業者 即是称仏名 <u>称</u>名必得生 依仏本願故」「文〕

又曰「当知 生死之家以疑為所止 涅槃之城以信為能入」[文] 『選択本願念仏集』といふは、聖人(源空)の御製作なり。「南無阿弥 陀仏往生之業念仏為本」といふは、安養浄土の往生の正因は念仏を 本とすと申す御ことなりとしるべし。正因といふは、浄土に生れて 仏にかならず成るたねと申すなり。

またいはく、「夫速欲離生死」といふは、それ<u>すみやかに疾く生死をはなれんとおもへ</u>となり。「二種勝法中且閣聖道門」といふは、「二種勝法」は、聖道・浄土の二門なり。「且閣聖道門」は、「且閣」はしばらくさしおけとなり、しばらく聖道門をさしおくべしとなり。「選入浄土門」といふは、「選入」はえらびていれとなり、よろづの善法のなかに選びて浄土門に入るべしとなり。「欲入浄土門」といふは、浄土門に入らんと欲はばといふなり。「正雑二行中且抛諸雑行」といふは、正雑二行二つのなかに、しばらくもろもろの雑行をなげすてさしおくべしとなり。「選応帰正行」といふは、選びて正行に帰すべしとなり。「欲修於正行正助二業中猶傍於助業」といふは、正行を修せんと欲はば、正行・助業二つのなかに助業をさしおくべしとなり。「選応専正定」といふは、選びて正定の業をふたごころなく修すべしとなり。「正定之業者即是称仏名」といふは、正定の業因はすなはちこれ仏名をとなふるなり。正定の因といふは、かならず無上涅槃のさとりをひらくたねと申すなり。

「称名必得生依仏本願故」といふは、御名を称するはかならず安楽

浄土に往生を得るなり、仏の本願によるがゆゑなりとのたまへり。またいはく、「当知生死之家」といふは、「当知」はまさにしるべしとなり、「生死之家」は生死の家といふなり。「以疑為所止」といふは、大願業力の不思議を疑ふこころをもつて、六道・四生・二十五有・十二類生 [類生といふは一、卵生 二、胎生 三、湿生 四、化生 五、有色生 六、無色生 七、有相生 八、無相生 九、非有色生 十、非無色生 十一、非有相生 十二、非無相生] にとどまるとなり、いまにひさしく世に迷ふとしるべしとなり。「涅槃之」と申すは、安養浄利をいふなり、これを涅槃のみやことは申すなり。「以信為能入」といふは、真実信心をえたる人の、如来の本願の実報土によく入るとしるべしとのたまへるみことなり。信心は菩提のたねなり、無上涅槃をさとるたねなりとしるべしとなり。

「生死之家」は、次の用例では「生死輪転家」と言われている。

**資料 22**(教行信証 207, cf. 文類聚鈔 489): <u>生死輪転の家</u>に還来ることは、決するに疑情をもつて所止とす。 <u>すみやかに寂静無為の楽(み</u>やこ)に入ることは、かならず信心をもつて能入とす。

以上簡単に親鸞の「生死」の用例とその使用の枠組みを検討した。

#### 註

(1) 「四門出遊」伝説において、釈尊は老病死という問題を決して避けられない課題と捉え、沙門こそ理想の問題解決形態だと確信して、出家したと伝えられる。成道は沙門としての修行の成果であり、出家を最上の仏道としたことは、実子ラーフラを出家させたことに象徴的に示される(大乗仏教におけ

生死を超える道――親鸞が見出した仏道――(沖 和史) ― 49 ―

- る「一子地」の思想もラーフラを出家させた釈尊の真の慈悲を模範とし、大 悲が一切衆生に平等に及ぶことを表わしている)。説法は出家の法と在家の 法に分かれていたとされ、涅槃を得る道を歩むのは出家に限られている。
- (2) 『選択本願念仏集』(『浄土真宗聖典七祖篇――註釈版――』本願寺出版社,1996年3月)1209-1210:ゆゑに知りぬ,念仏は易きがゆゑに一切に通ず。諸行は難きがゆゑに諸機に通ぜず。しかればすなはち一切衆生をして平等に往生せしめんがために,難を捨て易を取りて,本願となしたまへるか。(中略)まさに知るべし,上の諸行等をもつて本願となさば,往生を得るものは少なく,往生せざるものは多からん。しかればすなはち弥陀如来,法蔵比丘の昔平等の慈悲に催されて,あまねく一切を摂せんがために,造像起塔等の諸行をもつて往生の本願となしたまはず。ただ称名念仏一行をもつてその本願となしたまへり。ゆゑに法照禅師の『五会法事讃』にいはく,「かの仏の因中に弘誓を立てたまへり。名を聞きてわれを念ぜばすべて迎へに来らん。貧窮と富貴とを簡ばず,下智と高才とを簡ばず,多聞にして浄戒を持つを簡ばず,破戒にして罪根の深きをも<u>簡ばず</u>。ただ心を回して多く念仏せば,よく瓦礫をして変じて金となさしめん」と。

親鸞が受け継いだ源空の思想の核心は、本稿「3.源空の仏道――凡夫成仏の必然としての行信――」において示した。平等の慈悲の決定的重要性は、上に引用された法照禅師の『五会法事讃』を親鸞が詳しく説明している点からも明らかである。

なお、本稿作成にあたり、浄土真宗教学伝道センターの『浄土真宗聖典』 聖教データベースを利用した。

- (3) 算用数字は『浄土真宗聖典――註釈版――』(本願寺出版部,1988年1月) のページ数である。以下同じ。
- (4) 「寂静無為楽(じゃくじょうむいのみやこ)」という表現は善導に由来するが、これが源空の「涅槃之城」の言い換えであることは明らかである。